

投稿論文

研究論文・研究ノート

日本子ども学会では、2018年度に7編の投稿論文の審査を行い、4編を採択いたしました。

本誌では、このうち採択論文1編を掲載いたします。

編集委員および査読者は以下のとおりです。

編集委員

菅原ますみ
(編集委員長)

太田美代
大橋節子
木下 真
榊原洋一
佐藤朝美
志村洋子
眞榮城和美
宮下孝広
渡辺富夫

査読者

朝倉民枝
安藤寿康
太田美代
上垣内伸子
木下 真
榊原洋一
佐藤朝美
菅原ますみ
瀬尾智子
眞榮城和美
宮下孝広

遊び場に対する幼児と保育者の認識の諸相 — 選好の多様性と視点の多重性 —

杉本貴代 (愛知大学短期大学部) 秋田喜代美 (東京大学大学院教育学研究科)
宮本雄太 (東京大学大学院教育学研究科・日本学術振興会) 宮田まり子 (白梅学園大学)
辻谷真知子 (白梅学園大学・日本学術振興会) 石田佳織 (園庭研究所)

要約

本研究では、中部地方の保育所2園の4～5歳児合計91名とその保育者13名を対象に、幼児の好きな遊び場に対する幼児自身と保育者の認識の特徴を検討した。調査方法は、モザイク・アプローチを参照し、写真投影法と個別面接法（保育者には質問紙）を採用した。幼児に園内の好きな遊び場を15分間撮影してもらい、その遊び場について面接調査を行った。各園の幼児と保育者間、および保育者の職務別（担任・担任以外）の認識を分析した。その結果、対象児は園内の多様な場を好み、好きな遊び場が一人平均7箇所前後あり、ランクづけできることが分かった。保育者の職務や役割による違いは遊び場のとらえ方等に表れており、担任は遊び場を具体的な状況とともに認識していたのに対し、担任以外の保育者はより抽象的にとらえる傾向がみられた。保育者の認識は幼児と大きくずれておらず、異なる職務・立場の保育者が相補間的に幼児の多様な選好を認識していた。園全体で実践知を共有しつつ、幼児独自の視点もと入れながら、環境構成していくことが、保育の質の向上に重要であることが示唆された。
キーワード：保育所、幼児の遊び場選好、保育者の認識、視点の多重性

1. 問題と目的

保育において、人とののかかわりの質や、遊びや学びを生み出す環境構成のあり方は、保育のプロセスの質と呼ばれ、乳幼児の発達と学びを強く保証するものとして重要視されている（OECD, 2018）。しかしながら乳幼児を取り巻く社会環境の変化や社会の要請に応じて保育者の環境構成への配慮も変化するものであり、乳幼児の遊び空間の使い方と保育者の考える保育環境の間には常に「ずれ」が生じやすい（Hunleth, 2011）。保育の構成員である乳幼児一人ひとりの声を聴き、日々の環境構成に生かすことは、子どもの主体性を育む保育実践に重要である（Clark & Moss, 2011）。

本稿では、保育のプロセスの質に大きく関与する「遊び場」に対する幼児と保育者の認識の特徴について検討する。

保育施設における幼児自身の遊び場の認識やそれに対する保育者の認識については、これまでに園横断的な調査により、保育者と幼児のそれぞれの認識の特徴をとらえる試みがなされてきた。たとえば、宮本他（2016）は、幼児の語りから得られた子どもの好む遊び場の「8つの特徴」として、隠れ家の性質が表れる場、過去の経験と関係がある場、多様性・選択可能性がある場、他児からの影響がもたらされる場、幼児なりの規範が表れる場、挑戦ができる場、待ち合わせができる場、願望が持てる場を挙げている。

さらに宮本他（2017）では、遊び場に対する子ども

と保育者の認識の特徴を分析し、空間要因と状態要因という大きく2種類の要因（場の特徴づけ）を提案している。空間要因とは、遊び場の物理的・機能的視点にもとづく特徴であり、活動展開可能性がある場、隠れ家的な場、高揚感を抱く・挑戦できる場が挙げられる。一方、状態要因とは、遊び場での子どもの心理的状态に注目した視点であり、幼児の表層と深層を見取る視座、心身の近接性を見取る視座、育ちのプロセスを見取る視座と定義される。幼児の語りでは遊び場の状態要因に関する内容が多くみられた（語りの約8割）のに対し、保育者は、空間要因と状態要因の両方に注目し、遊び場を多面的かつ間主観的に捉える傾向がみられたと報告している。

しかし、これらの研究は園横断的な調査にもとづいており、園内環境の多様性や、同一園内の幼児と保育者、あるいは保育者間の認識の差異については検討されていない。保育者の職務には担任、主任、預かり保育担当など様々あり、保育者が寄り添う子どもや担当する時空間も異なることから、職務や立場によって遊び場の認識に特徴が見られる可能性が考えられる。職務の違いとの関連から保育者の「遊び場」のとらえ方の特徴（相違や共通性）に注目することは、園全体としての保育の質の維持・向上に有益な情報を提供すると同時に、保育者の主体性とチームワーク形成に寄与すると考えられる。杉本他（2018）の同一園の保育者を対象とした調査では、担任保育者と、担任以外の保育者では、職務と選んだ遊び場の空間に共通性がみら

れ、職務と遊び場の認識の形成との関連の可能性が示唆されている。しかし、同一園内での幼児と保育者の遊び場の認識については検討されていない。そこで本研究ノートでは、環境を共有する幼児と保育者の認識の諸特徴を報告することとした。

1.2 目的

本研究の目的は、同一園内の幼児と保育者の「遊び場」の認識の特徴について比較するとともに、保育者の職務等の違いにも注目し、保育者間の認識の特徴を明らかにすることである。リサーチ・クエスチョンは三つある。第一に、園内に幼児の好きな遊び場はいくつあるか。第二に、保育者は幼児の遊び場の選好をどの程度とらえており、限界はあるか。第三に、保育者の職務・役割の違いによって遊び場の認識にはどのような特徴が見られるか。

2. 方法

本研究は、中部地方の二都市の幼児と保育者を対象とした質的調査である。対象園は、有意サンプリング (purposeful sampling; Moore, 2014) により、中規模都市にある認可保育所2園 (A市A園, B市B園) を選定した。選定理由は、2園は地理的に近くかつ自然豊かな地域に位置する保育所であり、遊びを通した保育という点で共通するためである (McInnes et al., 2013)。調査時期は、A園が2017年1月～3月、B園が2018年2月～3月であった。調査に先立ち、保護者に文書にて研究調査依頼状を配布し、保護者の承諾を得た幼児のみを研究対象とした。A園に通園する5歳児26名と4歳児22名と、保育者合計6名 (担任4名と主任およびフリー1の保育者各1名) であった。6名の保育者が、5歳児と4歳児の各学年の遊び場

の選好について、それぞれ10箇所を回答した。B園は4歳児2クラス合計43名と保育者7名 (担任4名、フリー、主任、副主任各1名) を対象とした。

幼児対象の調査の手続きは、混合法のひとつであるモザイク・アプローチ (Clark & Moss, 2011) の枠組みを参考にし、写真投影法と個別面接法を採用した (宮本他, 2016・2017)。まず、幼児にカメラを渡して園内の「好きな場所」を自由に好きなだけ撮影してもらった。撮影時間については担任の保育者と相談し、対象児が飽きずに楽しく取り組める15分以内とした。さらに後日、幼児が撮影した好きな場所について、個別面接法による聴き取り調査を行なった (各15分以内)。半構造化面接形式にて、写真の遊び場を幼児にランク付けしてもらい、①各場所の命名 ②好きな理由 ③そこでの遊び方を尋ねた。保育者対象の調査では、保育者に4歳児が好きな場所10箇所 (A園では4歳・5歳児についてそれぞれ10箇所を回答) とその理由を記述で回答してもらい、各保育者にその場所の写真を撮影してもらった。

3. 結果と考察

3.1 幼児の好きな遊び場

本研究では、対象児にデジタルカメラで好きな遊び場の写真を撮影してもらい、遊び場を視覚化した。その結果、幼児の選好は多種多様であり、屋内空間 (保育室など)、屋外空間 (園庭、遊具など) だけでなく、中間空間 (廊下や階段、デッキなど) にも好きな場所があることが分かった。また、幼児は園内に好きな遊び場が一人あたり平均7箇所前後あり、自らランク付けできた (表1)。なお、先行研究 (宮本他, 2016) では幼児が好きな場所を3箇所のみ撮影する方法を用いており、個々の選好を捉えられていなかった。一方、

表1：園内の幼児の好きな遊び場 (園ごとの結果)

	A園5歳児(26名)	A園4歳児(22名)	B園4歳児(43名)
1. 子どもの好きな遊び場合計	65箇所	48箇所	65箇所
内訳 屋内空間(%)	26箇所(40%)	12箇所(25%)	26箇所(40%)
中間空間(%)	11箇所(16.9%)	4箇所(8.3%)	20箇所(30.8%)
屋外空間(%)	28箇所(43.1%)	32箇所(66.7%)	19箇所(29.2%)
一人あたり平均(レンジ)	7.7箇所 (5～14)	6.9箇所(3～14)	7.1箇所(1～14)
2. 保育者回答場所数合計	43箇所(6名)	36箇所(6名)	33箇所 (7名)
保育者と幼児との一致場所数	37箇所	24箇所	30箇所
回答重複率 ²	86%	67%	90.9%
内訳 屋内空間(%)	12箇所(46.2%)	7箇所(58.3%)	5箇所(19.2%)
中間空間(%)	8箇所(72.7%)	2箇所(50%)	6箇所(30%)
屋外空間(%)	17箇所(60.7%)	15箇所(46.9%)	19箇所(100%)

本研究では「幼児が好きなだけ撮影し、ランク付けする」方法を採用したことにより、幼児の回答が制限されることなく、個々の選好をより詳しく捉えられることが確認できた。

2園の保育者と幼児の回答を比較したところ、どちらの園でも保育者がとらえている認識は、幼児本人の認識から大きくずれていないことが分かった。A園の保育者6名は、5歳と4歳の子どもの好きな場所をそれぞれ10箇所ずつ回答したが、保育者の回答43箇所中、37箇所が5歳児の回答と一致し（表1の回答重複率86%）、4歳児に関しては保育者の回答36箇所中、24箇所が4歳児の回答と一致した（67%）。B園では4歳児のみを対象としたが、保育者7名が選んだ遊び場の33箇所中、30箇所（90.9%）が4歳児の回答と一致した。職務や立場が異なる複数の保育者の声を集約することで、幼児の多様な認識にかなり接近できることが分かった。

3.2 保育者が認識しにくい「幼児の好きな遊び場」の特徴

本研究の対象園の幼児が選好した遊び場の中で、保育者が回答しなかった遊び場について検討する。保育者が認識しにくい幼児の好きな遊び場の特徴は二つあり、①幼児が見て楽しむ場と②幼児が遊びのために作りだした独自の空間であった。先行研究においても幼児は保育室などの壁面装飾を好きな場所として選好する傾向が報告されている（宮本他, 2016）が、「見て楽しむ場所」への幼児の選好が本研究でも再確認された。具体的には、A園では、絵を教えてくれる地域の方が園児に贈った絵画、遊戯室の壁面装飾、工事中の新園舎等を見て想像を楽しんでいる幼児がいたが、保育者は遊び場と想定していなかった。B園の幼児も同様に、自分たちの共同制作が飾られている壁面や、廊下壁面

の職員の写真一覧、二階の廊下からの園庭の眺めなど、「見て楽しむ」場所を好きな遊び場と回答したが、保育者は認識していなかった。幼児にとって「見ること」が遊びにつながり、見て想像して楽しむ場、思い出がある「愛着のある場」となっている可能性がある。

また、幼児の語りから、幼児は自ら創造した遊び空間も好んでいることが分かった。A園では、園庭の隅に置かれた「U字溝」を舞台に見立てて歌やごっこ遊びを楽しんでいる女児たちや、園庭の隅の「木の切り株の空洞」に入ってお家ごっこをしている男児たちがいた。幼児は環境の特徴を生かし、自ら好きな遊び空間を作り上げていた。B園では、かくれんぼが流行っており、低年齢児用のすべり台の「下の空間」を隠れ家にして遊んでいることも分かった。

幼児一人ひとりの声を聴くことにより、幼児の好きな遊び場は多様であり、保育者が考えつかないような場所も幼児にとって好きな場所として存在することが明らかになった。

一方、保育者は回答したが幼児は回答しなかった場所には、A園の非常時避難用すべり台、室内の切り株、B園の4歳児クラス内の遊びのコーナー、事務室などがあった。保育者はこれらの場所で遊ぶ幼児の姿を観察していたが、本研究の対象児は遊び場と認識していなかった。

3.3 保育者の職務ごとに比較した認識の特徴－担任と担任以外の保育者の遊び場のとらえ方の特徴

保育者間の認識の共通点や相違点をさらに検討するために、保育者を担任と担任以外（主任、フリー等）という職務や立場に注目して自由記述回答を検討したところ、両者の保育者の認識に特徴が見られた（表2）。

まず、担任保育者は、各場所での具体的な幼児の姿や遊び方をイメージして理由づけしていた。担任は日

表2：A園の幼児と保育者（担任、担任以外）の回答例（★は幼児と保育者が共有している内容）

	幼児の回答例	保育者の回答例
つり輪のうんてい	① つり輪が上手になったから好き。全部できる。★ ② ぶらぶらするのが楽しい。3回ぶらぶらしてる。★ ③ いつも〇〇ちゃんとやってる。	担任 A：日に日にできるようになって、うれしい、楽しい 担任 B：クラスの子どもの中で流行っている フリー：ぶら下がる、ゆれる感覚が心地よい
絵本コーナー	① 字が読めるのがうれしいから。一人で読む。 ② 好きな本があるから。先生が（クラスで）読んで終わったら、ここに入る。そしたら読む。★	担任 C：大好きな絵本を落ち着いてじっくり読めるから。 担任 D：好きな絵本を選んでゆつくりと自分の世界を楽しむ。

常にクラスの子どもたちの遊ぶ姿にもとづいた認識、価値づけをしているためと考えられる。一方、担任以外も幼児の視点で遊び場をとらえているが、遊び場や幼児の姿をより抽象化したとらえ方をしており、幼児の好む遊び場の特徴や機能、魅力を一般化させていると考えられる。担任保育者の回答には、実際に幼児が語った内容に近い表現が多くみられたのに対し、担任以外の保育者はより一般化させた解釈をした。これらの複数の視点・認識のあり方は、幼児の現状を踏まえつつ中長期的視点から遊び環境を考える際に役に立つ。

A園と同様に、B園の担任保育者の語り（選んだ理由）は具体的であり、常にかかわる幼児の姿を描写し

ており、個々のエピソードなどを交えて回答していた（表3）。

3.4 保育者が考える「幼児の好きな遊び場」のある場所―職務と認識した遊び場の空間分類の関連

2園の保育者の認識した遊び場について、場の分類と職務で比較した結果、担任と担任以外では、選んだ場所の空間に特徴が見られた（図1&2）。

具体的には、A園の5歳児とフリー、主任の保育士は屋内の遊び場を多く認識していたのに対し、4・5歳児担任は屋外に子どもの遊び場を多く見出していた。同園では担任以外の保育者が日常的に自由遊び時間にクラスに入って幼児と遊ぶ機会が多いためと考えられる。B園の担任4名も、屋外空間に幼児の好きな

表3：B園の保育者（担任、担任以外）と幼児の回答例（★は幼児と保育者が共有している内容）

	幼児の回答例	保育者の回答例
砂場	①玩具を埋めて宝物探しをする。みんなに見つけてもらう。（自分）深いところに埋めちゃうから。 ②（型で）お花のプリン作って、○○ちゃんたちとプリン・パーティして遊ぶ★	担任A：友達と協力して山作りなどをして楽しんでいるため。 担任B：型、スコップ、バケツなどいろいろな玩具で砂遊びを楽しんでいるから。 主任：自分のペースで遊んだり、異年齢児とかかわったりでき、落ち着いて遊べる場所だから。
土山	①泥団子作れるから。★ ②高くてそこにあるのがおもしろいから。雨で濡れてたら、ジャンプして遊ぶ。★ ③水がない時はキャッチボールとかする。（土山中央の）穴に落ちないように、投げたらキャッチ。	担任B：泥団子が作りやすかったり、「工事で～す」と言いながら遊んでいることが多かったりするから。雨が降った後は水溜りができるから。 担任C：泥団子が丸く上手に作れるようになり、夢中になってきている子が多いため。 主任：泥団子ができる楽しい場所。
乳幼児用小型ログハウス	①おうちごっこするのが楽しい。★ ②中でごろーんとかできる。よく隠れてる。 ③お料理とか作る。★ ④だって楽しいもん。○○ちゃんと遊ぶ★	担任D：家の中で、おまごとしたり、友達と楽しそうに遊んでいるから。 フリー保育者：お家やお店のごっこ遊び、イメージ遊びができる。 副主任：大人の目が届きにくく、秘密の基地感がある。
遊戯室	①リズムとかするのが好き。★ ②お誕生日会とかするし、先生のお歌がきれいだから。★ フェスタとかやるから。船とかやる。★	担任：リズム（遊び）をして体を動かしたり、誕生会など様々な楽しい行事を行う場所だから。 主任：広くてのびのびと遊べる場所。いろいろな行事を経験できる。

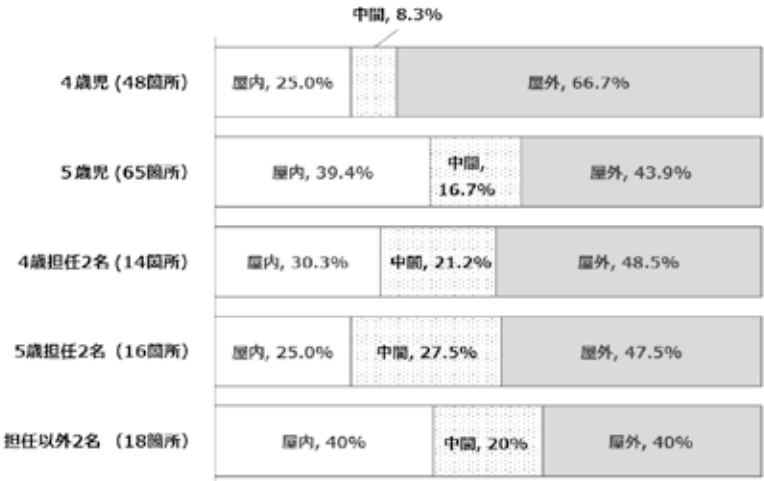


図1：A園の幼児と保育者が認識した遊び場の空間分類

遊び場をより多く見出していたのに対し、担任以外の保育者3名は、廊下の本棚や給食室前の献立見本台などの中間空間をより多く回答した。またB園の保育者全体の回答傾向は、幼児の回答傾向（屋外＞中間＞屋内空間の順）と類似しており、同園の保育者はチームとして幼児全体の選好をとらえていると解釈できる。

園により認識率は異なるが、A園の担任以外の保育者は中間空間と屋外にある遊び場をよりよく理解し、担任は屋外空間をよりよく理解していた。B園の担任保育者は、屋内空間と屋外空間における幼児の好きな遊び場を、担任以外の保育者よりも多く理解していた。一方、担任以外の保育者は、とくに中間空間において幼児の遊び場を担任よりも多く認識していた。このことから、時間帯や空間によって、幼児の様子をよりよく認識できる保育者が異なりうることが示唆される。職務や役割が異なる保育者が互いに情報を共有しつなぎ合わせることで、幼児一人ひとりに対する深い理解につながると期待される。

4. 総合考察と結論

本研究では、幼児の好きな遊び場について、同一園内の幼児と保育者の認識の特徴を比較した。幼児に好きなだけ遊び場の写真を撮影してもらった結果、幼児の好きな遊び場は多種多様であること、対象園児一人あたり平均7箇所前後あること、集団または個人で楽しめる場所など様々な場が好まれていることが分かった。また、幼児本人の語りから、見ることも幼児にとって遊びであることや、幼児自身が自由に遊び空間を創り出して遊んでいることが分かった。このように幼児の多様な声を聴いて園環境に対する幼児の選好や評価を知ることにより、各園が幼児の視点で遊び環

境を考える重要な手がかりとなる。

一方、保育者においては、担任や担任以外の「複数の目」で、遊びの主体である幼児の多様な選好を理解していることが示された。保育者はそれぞれの立場から多面的に幼児を観察し、かわり、理解している。担任保育者は幼児の遊び場をより具体的に読み取る一方で、担任以外は、担任の第二の目となって園内の遊び場での幼児の姿を一般化して評価しており、両者は相互補完的に幼児と遊び場を認識していると言える。保育者の職務の違いによる認識の特徴と幼児の独自の視点や評価が多重性・多面性を形成し、それらが園全体で共有されたときに貴重な実践知となるだろう。

なお、本研究の課題として、保育者対象の調査では写真と記述回答を一人10箇所までとしたため、保育者の多様な認識を十分に問えなかった可能性も否めない。園全体の実践知をより正確にとらえることを今後の目標としたい。

謝辞

本研究にご協力くださいました保育所の職員の皆様、そして子どもさんたちとその保護者の皆様に心より感謝申し上げます。本研究は、東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター（Cedep）の2016～2018年度関連SEED研究プロジェクト（代表：秋田喜代美）の助成を受けて実施されたものです。

〈引用文献〉

- Clark, A. & Moss, P. (2011). *Listening to Young Children*. Second Edition. National Children's Bureau.
- Hunleth, J. (2011). Beyond on or with: Questioning power dynamics and knowledge production in 'child-oriented research methodology'. *Childhood* 18 (1). pp81-93.

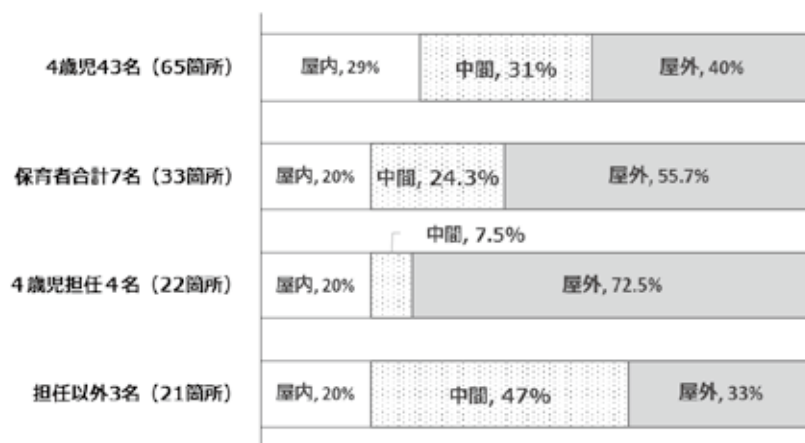


図2：B園の幼児と保育者が認識した遊び場のある空間分類

- 宮本雄太・秋田喜代美・辻谷真知子・宮田まり子. (2016). 幼児の遊び場の認識：幼児による写真投影法を用いて. 乳幼児教育学研究 No.25. pp9-21.
- 宮本雄太・秋田喜代美・杉本貴代・辻谷真知子・宮田まり子. (2017). 保育者が捉える幼児の遊び場の認識. 国際幼児教育研究 Vol. 24. pp61-76.
- McInnes,K., Howard,J., Crowley,K. & Miles,G. (2013). The nature of adult-child interaction in the early years classroom: Implications for children's perceptions of play and subsequent learning behavior. *European Early Childhood Education Research Journal* Vol.21. pp268-282.
- Moore, D. (2014). Interrupting listening to children: Researching with children's secret places in early childhood settings. *Australian Journal of Early Childhood*. Vol. 39. No.2. pp4-11.
- Moore, D. (2015). 'The teacher doesn't know what it is, but she knows where we are': young children's secret places in early childhood outdoor environments. *International Journal of Play*. Vol. 4, No.1. pp20-31.
- OECD (2018). *Engaging Young Children: Lessons from Research about Quality in Early Childhood Education and Care. Starting Strong*. Paris: OECD Publishing.
- 杉本貴代・秋田喜代美・宮本雄太・辻谷真知子・宮田まり子・石田佳織. (2018). 保育者は子どもの遊び場をどのように捉えているか？－2年間のインタビュー調査より－. 日本保育学会第71回全国大会 発表論文集 p586.

注)

- 1) フリーの保育士とは、担任ではないが必要に応じて様々なクラスに入り保育に携わる保育専門職の職務・役割を指す。雇用形態を指すものではない。
- 2) 回答重複率＝保育者の回答のうち幼児と一致していた箇所数／保育者の全回答箇所数